

5. 進行がん症例に対する緩和ケア外来通院による予後改善効果

大塚正友¹ 小山敦子² 松岡弘道³ 仁木稔² 牧村ちひろ³ 阪本亮²
酒井清裕² 福岡正博⁴

¹近畿大学医学部堺病院緩和ケア科 ²同心療内科 ³近畿大学医学部内科学教室 (腫瘍内科部門)

⁴近畿大学医学部堺病院腫瘍内科

目的 がん患者に対し、診断後早期からの緩和ケアの介入が望ましいとされている。これまでに、進行肺癌症例において早期緩和ケア介入が予後の改善をもたらしたとの報告があるが、予後延長の要因は明らかとなっていない。今回、進行癌症例に対する早期介入、特に外来通院可能な時期よりの緩和ケア介入が全生存期間 (OS)、化学療法施行期間、Post-progression survival (PPS) 等にもたらす影響を検討した。

対象 2007年10月から11年9月までの4年間に当院緩和ケア科へ入院の上、死亡した症例を対象とし、がん診断時期が診療録より不明な症例は除外した。

方法 対象症例201例を、外来通院が6日間以下の群 (以下非外来通院群) と7日間以上外来通院を行った群 (以下外来通院群) に分け、レトロスペクティブ

に検討した。

結果 対象症例数は非外来通院群64症例、外来通院群137症例で、OSは7.3ヶ月対19.8ヶ月 ($P<0.001$) であった。予後延長の要因を検討するために診断時IV期かつ化学療法の既往の有る症例で、OS、化学療法施行期間、PPSの変化を検討した。この中で特に、化学療法施行既往のある非小細胞肺癌の16例において、OSが非外来通院群では3.5ヶ月、外来通院群で14.0ヶ月 ($P=0.015$) であり、化学療法施行期間が1.9ヶ月対6.0ヶ月 ($P=0.115$)、PPSが0.7ヶ月対2.7ヶ月 ($P=0.018$) であった。

考察 IV期非小細胞肺癌において、緩和ケア外来への早期対診が、化学療法施行期間の延長と化学療法中止後の余命の延長につながり、全生存期間の延長をもたらしていることが示唆された。

6. SpO₂ ヒストグラムによる新生児慢性肺疾患の重症度評価

南方俊祐 和田紀久 井上智弘 伊豆亜加音 小西悠平 西一美
竹村 司

近畿大学医学部小児科学教室

目的

近年、本体のボタン操作のみで任意の期間のSpO₂ ヒストグラムを表示する機能を有するパルスオキシメータが開発された。この機能を利用して新生児慢性肺疾患 (以下CLD) 児の酸素化能、すなわち重症度を簡便に、かつ定量的に評価することを試みた。

対象と方法

対象は2011年1月から2012年4月までに当院NICUに入院した極低出生体重児25例 (CLD 11例、非CLD 14例)。平均在胎週数はCLD群26週2日 (23週6日-31週5日)、非CLD群29週6日 (26週5日-33週5日)、平均出生体重はCLD群847g (676g-1298g)、非CLD群1080g (758g-1398g) であった。1分/5分の平均Apgar ScoreはCLD群4.0/6.6 (1-7/4-8)、非CLD群6.5/8.3 (3-8/6-10)、平均人工呼吸管理日数はCLD群31.8 (7-73)、非CLD群2.0 (0-10)、平均酸素投与日数はCLD群58.6 (36-95)、非CLD群13.5 (0-28) であった。 Nellcor パルスオキシメータ N-600X を用いて、人

工呼吸管理離脱後から週毎にSpO₂ を1-24時間で記録し、SpO₂ が96%以上を占める時間の割合 (以下96% TIME)、及び安静時のルームエア下でのSpO₂ 値 (以下RAS) を記録した。

結果

96% TIMEの平均値は経時的に上昇し、いずれも非CLD群で高かった。また、RASの平均値も同期間に経時的に上昇し、常に非CLD群で高かった。

考察

96% TIMEおよびRASが経時的に上昇したことは、これらがCLD児における酸素化能を評価しようと考えられた。2群間でのRASの差がなくなってからも96% TIMEは有意差を認めていた。このことは96% TIMEが酸素投与が不要となったCLD児においてさえ、その重症度評価を鋭敏に評価できると考えられた。

結論

SpO₂ ヒストグラムにより新生児慢性肺疾患の重症度を簡便に、定量的に評価できることが示唆された。